

令和 7 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

時代を超えて受け継ぐ「自主・自律・自由」の校風のもと、予測困難な 21 世紀社会をしなやかにたくましく生き抜く力を育み、多様性を認め、人と人・社会との繋がりを大切に行動する意識を醸成し、それらによってこれからの多文化共生社会をリードし、より良い世界を創ることに貢献できる人間を育成する学校

そのために、すべての教育活動を通じて、以下の力を育む。

1. 幅広い教養を身に付け、主体的に学ぶことができ、自らのキャリアをデザインする力

2. 広い視野と当事者意識を持って社会や世界の課題に向き合い、意見の交換や調整を通して協働して課題を解決する力

3. 多様性を認識し、互いに切磋琢磨し支え合いながら、未知なるものに果敢に挑戦し、新しい価値を創造する力

また、このような教育活動を推進するために、教職員の同僚性を高め、新たな課題に対してもチームで克服できる体制を整え、学校力を向上させる。

2 中期的目標

- 1 幅広い教養を身に付け、主体的に学ぶことができ、自らのキャリアをデザインする力を育む。
- ア 生徒が自ら課題設定ができ自学自習できるように、主体的な学びの姿勢を引き出して、積極的意欲的に学習に取り組む力を育成する。
- イ 体験的な活動や探究的な学習等を取り入れて、課題を設定し解決する力や、科学的で論理的な見方、考え方、表現力等を育成する。
- ウ 新学習指導要領や高大接続改革など、新たな教育課題に対応できるよう組織的に教員の授業力の向上をめざす。
- エ 三年間を見据えた進路指導計画を更新し、生徒・教職員・保護者間でその内容を共有し、進路指導を充実させる。
- オ 普通科改革にむけて、「総合的な探究の時間」の取組みの強化充実を図るとともに、特色・魅力あるカリキュラム及び教育方法の研究を行い、あわせて大学や企業等関係機関との連携協力体制を構築することにより、全ての生徒のキャリア形成を支援し、進路希望の実現を図る。
- カ リーディング GIGA ハイスクールの指定を受け、1 人 1 台端末の利活用を含め、ICT の積極的かつ効果的な利活用の研究を行う。
- ※ 授業アンケートにおいて、授業に対する生徒の興味・関心の喚起と知識・技能の定着の観点から授業を評価し、継続的な向上を図る。
- ※ 学校教育自己診断において、生徒「授業は自分の学力向上に役立っている」の積極的回答、令和 7 年度以降 90%以上を維持する。(R 4 :88. 5%、R 5 :91. 3%、R 6 :94. 4%)
- ※ 学校教育自己診断において「生徒 1 人 1 台端末は役立っているか」の肯定的回答を、令和 9 年度までに生徒、保護者とも 70%以上をめざす。(R 4 生徒 56. 1 %、保護者 68%、R 5 生徒 57%、保護者 72. 8%、R 6 生徒 59. 6%、保護者 74. 7%)
- ※ 生徒の進路希望の実現を図り、令和 9 年度に、京大・阪大・神大の現役合格者数 30 名以上 (R 4 : 18 名 R 5 : 27 名 R 6 : 44 名) を含む国公立大現役合格者数 130 名をめざす。(R 4 : 103 名 R 5 : 98 名 R 6 : 134 名)
- 2 広い視野と当事者意識を持って社会や世界の課題に向き合い、意見の交換や調整を通して協同して課題を解決する力を育む。
- ア 「自主・自律・自由」の精神の本校の伝統を引き継ぎ、Post コロナの時代の新しい生活様式の下で意欲的に活動する力を育む。
- イ さまざまな学校行事や生徒会活動の中で、協力と協働の精神を育み、ともに高めあう力や自主的に活動する力を育成する。
- ウ 生徒会活動・ボランティア活動の活性化を図り、地域や社会との関わりの中で成長させる。
- エ 社会や世界の課題に触れ、それについて仲間とともに解決策を模索し、自分たちの考えを発信する力を育てる。
- ※ 生徒の「社会や世界の課題に関心を持ち、より良い世界を創ることに貢献しようという思いがある」について、令和 9 年度積極的回答 80%以上を維持する。[R 4 : 87. 9% R 5 : 93. 0% R 6 : 79. 6%]
- ※ プレゼンテーションやポスターセッションする機会を全学年で持ち、令和 6 年度までに学年を超えて学び合う機会を設ける。
- 3 多様性を認識し、互いに切磋琢磨し支え合いながら、未知なるものに果敢に挑戦し、新しい価値を創造する力を育む。
- ア 部活動・生徒会活動・学校行事等において、コミュニケーション力・調整力を養い、良好な人間関係を構築する力を育む。
- イ 人権尊重の意識の向上に努める。また、安全安心な学校づくりを推進し、教育相談委員会や専門医の指導による心身の充実強化の支援に努める。
- ウ 留学生や姉妹校との交流を含め、国際交流等の多様な機会を設けて、異文化理解を深め、コミュニケーション能力を高める。
- エ ユネスコスクールの取組みを様々な教育活動において発展させる中で、世界の持続発展に貢献できる力を育む。
- ※ 令和 9 年度まで、引き続き 1 年次の部活動加入率 95%以上の維持を図る。(R 4 : 95. 9% R 5 : 97. 0% R 6 : 97. 5%)
- ※ 保護者向け学校教育自己診断で、令和 9 年度まで、生徒の自主・自律・自由を重んじる校風に対する支持率 90%以上の水準維持に努める。(R 4 : 94. 2% R 5 : 94. 6% R 6 : 94. 5%)
- 4 教職員の同僚性を高め、新たな課題に対してもチームで克服できる体制を整え、学校力の向上を図る。
- ア 業務の見直し、組織の再編等により、より機能的な体制を作り、時間外勤務時間の縮小をめざす。
- イ 学年・分掌・教科間の連携を密にし、課題の共有や見える化を進め、諸課題に対して組織としてよりスムーズに動ける体制を構築する。
- ウ 諸課題に関して校内研修で学ぶ機会を設け、チームで取り組む体制を整え、組織的・継続的な人材育成を行う。
- ※ 新しい積算方法での時間外勤務の月平均を令和 9 年度まで、毎年、前年度より減らす。(R 4 : 39 時間 28 分 R 5 : 37 時間 16 分 R 6 : 36 時間 48 分)
- ※ 学校教育自己診断において、教職員の「各分掌や各学年間の連携が円滑に行われ、有機的に連携している」令和 9 年度まで 50%以上を維持する。(R 4 : 48% R 5 : 46. 1% R 6 : 62. 7%)

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔令和 7 年 12 月実施分〕	学校運営協議会からの意見
以下、特に説明の無い数値は肯定的な意見の割合〔単位％〕である。（ ）内は R6 年度数値。 【生徒】本校を選んだ理由として最も高いのが、「自由な校風だから」が 46.7（45.6）である。とりわけ 2 年生では 48.3％と他の学年より高い。その他の特徴としては、1 年生が「大学進学を考え勉強したいから」が 6.0％、3 年生は「通学に便利だから」が 19.9％と、他の学年と比較して高い値となっている。 「学校へ行くのが楽しいですか。」においては、3 年生の「とても思う」が 58.9％と突出した値となっている。授業については、「自分の学力向上に役立っている。」が 94.1（94.4）。進路指導については、「将来について考える機会がある。」が 95.4（96.6）と前年度より微減となっているが、総合的な探究の時間における取組みが定着してきている。 【保護者】「進路指導について」76.0（75.9）、「進路に関する情報の伝わり方」66.7（64.6）。「学校の情報提供」が 78.5（81.7）は微減となっている。また、「スクールカウンセラーによるカウンセリング等についての認知」について「知らない」との回答は、42.5（43.3）となっており、引き続き情報発信に努めていく。 【その他】教育相談体制については、生徒の「担任以外に気軽に相談できる先生がいる」が 71.4（68.4）となっており、年々増加している。また、「困っていることがあれば真剣に対応してくれる」が 96.8（96.6）で昨年の水準を維持している。生徒 1 人 1 台端末については、「クロームブックは役立っているか」の問いに対して、保護者では、75.5（74.7）と肯定的であるが、生徒 48.2（57）と昨年度よりも減少し、今後機器の更新を控えて、活用の余地が多く残されている。また、今回「事件・地震や火災などが起こった場合、どう行動したらよいか理解している。」が、92.9（82.4）と昨年度から約 10 ポイント増加した。これまで、雨天時等には教室で避難経路の確認することが多かったが、今年度は、グラウンドが使用できない場合も、学年別に校庭に避難して行動確認を行ったことで、強く意識づけることができたものと考えている。	【第 1 回】令和 7 年 7 月 4 日開催 ・行きたい大学にチャレンジする姿勢は大切である。志望校を変えることは、そのあとの生活を考えた時に、必ずしも良い結果につながるとは限らない。他の大学へ進学後、次年度に改めて受験する生徒もいるが、中途半端になる傾向がある。 ・学校特色枠については、部活動について考慮に入れたり、面接を行ったりするなど、様々な意見があるが、現実的に可能な案にならざるを得ない。 【第 2 回】令和 7 年 10 月 23 日開催（授業見学を実施） ・電子黒板機能付きのプロジェクタの活用が、以前に比べて増えている。教科や科目の特性によって、教科担当者の説明も、プロジェクタを活用しながらも、フリーハンドで黒板に絵や図を書くなど、それぞれの個性があって良い。 ・生徒 1 人 1 台端末を活用して、テキストを PC に入力するのも良いが、知識の定着のためには、やはり生徒が文字や文章をノートやプリントに書くことが必要。学校がこれまで育んできた文化を大切にしてほしい。 ・どの授業も静かで、生徒たちは取り組んではいるが、もう少し反応が欲しい。 ・黒板に書かれたことは、ノートやプリントに書いているが、それに加えて、聞いたことをメモする能力を育ててほしい。その力が、やがて社会に出た時に必要になる。 【第 3 回】令和 8 年 2 月 25 日開催 ・学校教育自己診断の結果については、単年の比較ではなく、5 年・10 年単位での変化をとらえた方が良い。 ・生徒会の活動については、時代にあった形を模索することが重要であり、何を求めるかという視点が大切である。 ・働き方改革については、5 段階での業務の仕分け等により、業務の位置付けを明確化するとともに、教員の意識改革が必要である。 ・中学校では、3 年前から部活動の地域展開に取り組んでいる。生徒の生活に余白を創ることが大切であり、学校での部活動が無くなっても、子どもたちは生き生きと生活している。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的 目標	今年度の 重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標 [R 6 年度値]	自己評価
1 幅広い教養を身に着け、主体的に学ぶことができ、自らのキャリアをデザインする力を育む	ア 積極的・意欲的に学習に取り組む力の育成	ア ・観点別学習状況の評価を指導に活かし、主体的かつ積極的に学習に取り組む姿勢を育成する。 ・前年度の学びの定着等にも配慮するとともに、学校生活実態調査や模擬試験等の分析会を行い、定着の低い分野等の補強等に活かす。	ア ・学校教育自己診断「授業は自分の学力向上に役立っている」の積極的回答 88%以上を維持。[94.4%] ・分析会の実施各学期1回。[各学期1回] 結果を教科において共有するとともに、教科指導の改善に活用し、効果を検証する機会を持つ。[各学期1回]	ア ・94.1% (○) ・スタサボ分析会 (5月) 模試分析会 (7月、12月) (○)
	イ 様々な学習の工夫	イ ・学ぶことの楽しさを知る機会を設ける。各教科において探究的な学習に取り組む。 ・英語四技能を伸ばし、実用的な英語力を育成する取組を行う。 ・リーディング GIGA ハイスクールの指定を受け、1人1台端末の効果的な利活用について、ICT 活用 PT (各教科、各学年1名) を中心に、研究を進める。	イ ・大学と連携した講座の実施 [新規] ・SDGs に関する取組の実施 5 回以上 [5 回] ・1 年：グループでのプレゼンテーション 1 回 2 年：スピーチ 1 回、英語エッセイ集の発行等 [1 年：1 回、2 年：1 回] ・ICT 活用 PT 主催の研修やワークショップを 3 回実施するとともに、生徒 1 人 1 台端末の効果的な活用方法について研究する機会を持つ。[3 回]	イ ・総合的な探究の時間 (9 月) (○) ・SDG s (5 回) (○) ・1 年 (1 回)、2 年選択科目 (2 回) 2, 3 年選択科目において、エッセイに取り組んだ。 (○) ・ICT 活用 PT 改革 PT 共催研修 (3 回) (○)
	ウ 授業力の向上	ウ ・互見授業を実施し、率直に授業について話し合える機会を設けると同時に、組織的な授業力向上の取組を行う。 ・観点別学習状況の評価について、引き続き検討を続け、授業力向上につなげる。また、評価に係る教務内規も含め、実施しながらよりよいものにしていく。	ウ ・互見授業 全教員実施。感想シートを活用。[1 回] ・観点別学習状況の評価をふまえた授業力向上のために全体研修を 4 回実施する。[新規]	ウ ・6 月、11 月に実施 (○) ・4 月、7 月、10 月実施 (○) 8 月は講師の日程調整が不調のため未実施
	エ 進路指導の充実	エ ・新1年生は、1 年次に文理分けを行うので、丁寧な説明と考える機会を工夫する。 ・3 年間の進路指導計画をキャリア探究と連動させ、生徒により広い視野で、自身のキャリアについて考えさせる。	エ ・1 年次文理分けに向けてのガイダンスを確立する。[2 回] ・キャリア探究と連動させた 3 年間の進路指導計画の更新 [更新済み] ・学校教育自己診断の積極的回答「進路に関する必要な情報を提供」生徒：90%以上 [93.3%] 保護者：「進路指導の適切さ」70%以上 [75.9%] 「情報の伝わり方」60%以上 [64.6%] を維持する。	エ ・6 月、10 月 (○) ・生徒 95.9% (◎) 保護者 76.0%、66.7% (○)
	オ キャリア形成支援による進路希望の実現	オ ・総合的な探究の時間「キャリア探究」を大学や企業等と連携し、強化充実する。 ・1 年次より自分の将来を描くことができるよう、様々な角度から将来について考える機会を設け、生徒の進路希望の実現を図る。 ・生徒のニーズに合う、効果的なサタデーセミナー(サタゼミ)を充実させる。	オ ・大学見学会の実施 [1 回] ・大学教授や企業研究員等による分野別説明会の実施 [1 回] ・学校教育自己診断の積極的回答 生徒「将来の進路や生き方を考える機会がある。」90%以上を維持する。[96.6%] ・京大阪大神大の現役合格者数 30 名前後 [44 名] を含む国公立大への現役合格者数 125 名以上。[134 名] ・総合的な探究の時間におけるキャリア形成支援に関する教職員研修の実施。[1 回] ・サタゼミの講座内容の充実を図り、参加生徒のアンケートで、肯定的解答 70%をめざす。[88.1%]	オ ・8 月実施 (○) ・6 月実施 (○) ・95.4% (○) ・京阪神 36 名、国公立大 115 名 (○) ・未実施 (△) ・100% (◎)

府立春日丘高等学校

2 広い視野と当事者意識を持って社会や世界の課題に向き合い、意見の交換や調整を通じて協同して課題を解決する力を育む	ア 伝統の継承と新しい生活様式の下での意欲的に活動する力 イ 学校行事・生徒会活動の中で、高め合う力・自主的に活動する力の育成 ウ 地域や社会との関わりの中での成長 エ 自分たちの考えを発信する機会	ア ・令和6年度取組みを踏まえ、引き続き6月の体育の部、9月の文化の部の円滑な実施と定着に向け、充実した取組みができるよう生徒を支援する。 ・「自主・自律・自由」の本質を理解し、TP0を意識して行動ができる生徒を育成するための指導の工夫を教職員が協同して進める。遅刻指導においても、担任の声掛けや学年と生徒部との連携を強める。 イ ・HR活動の充実を図り、協働して、自主的に活動する力を育成する。 ・選書活動や文集などの従来の取組に加え、生徒が読書に向かう機会を増やす取組を行う。 ウ ・地元NPOや中学校との連携生徒の活動の機会を増やす。 エ ・様々な取組みの中で、社会や世界の課題に触れ、仲間とともに考え、自分たちの意見を発信する力を育成する。	ア ・学校教育自己診断で、生徒の藤蔭祭への肯定的回答90%以上維持 [97.3%] ・年間遅刻数計1700回以下 [1811回] イ ・各学期1回、クラスで取り組む機会を設ける。 [各学期1回] ・文集「あゆみ」編集、発行 [65号発行] ・学校教育自己診断の「読書率」40%以上 [28.6%] ウ ・NPOや中学校との連携の機会3回以上 [3回] エ ・「総合的な探究の時間」での取組みをクラス・学年で発表するだけでなく、学年を超えて発表する機会を持つ。 [0回] ・「社会や世界の課題に関心を持ち、より良い世界を創ることに貢献しようという思いがある」の積極的回答80%以上。 [79.6%]	ア ・97.8% (○) ・2000回 (△) イ ・各学期実施 (○) ・発行済み (○) ・33.0% (△) ウ ・家庭科における連携 (2回) ・ユネスコスクールの取組み (1回) (○) エ ・茨木市の都市計画に関する発表会を実施 (2月) (1年総合的な探究の時間) ※地域への発信 (○) ・84.6% (○)
	ア 良好な人間関係の構築 イ 安全安心な学校づくりの推進 ウ 異文化理解 エ 世界の持続発展に貢献できる力の育成	ア ・藤蔭祭等の学校行事の実施や部活動を通じて、コミュニケーション力や調整力を身に付け、よりよい人間関係を構築する。 イ ・全教職員が協力して生徒理解を深めるとともに生徒の規範意識や人権意識を醸成する。 ・教育相談体制の一層の強化とケース会議等、生徒の心身の支援体制の構築。 ウ ・国際交流を工夫し、異文化理解を深める。 エ ・ユネスコスクールの活動の活性化をはかり、多くの生徒が行動するきっかけを作ったり、SDGsに関係する取組を推進し、学校外との連携や生徒の活動の場を広げ、生徒の成長につなげる。	ア ・学校教育自己診断「学校へ行くのが楽しい」の積極的回答90%以上。 [96.2%] イ ・学校教育自己診断で、保護者の「相談対応への満足度」70%以上維持 [71.9%] 及び、生徒の「担任以外にも気軽に相談できる先生がいる。」70%以上をめざす。 [68.4%] ・3年間の人権教育計画を更新する。 [更新済み] ・教職員人権研修を毎年1回計画的に実施する。 [2回] ・教育相談委員会で集約した情報の教職員への共有やケース会議等の開催等、より迅速に対応できる体制を作り、学校教育自己診断「体制の整備」教職員の肯定感75%以上維持 [86.3%] ウ ・交流の機会2回以上 [2回] ・対面でなくてもできる国際交流を企画し、実施する。 [1回] ・海外研修の実施と参加生徒による成果報告会の実施や地域の国際交流関係機関行事への参加。 [3回] エ ・総合的な探究の時間等で、これまでの実践事例を共有する。 [1回]	ア ・95.5% (○) イ ・保護者 73.6% (○) 生徒 71.5% (○) ・更新済み (○) ・1回実施 (○) ・86.6% (○) ウ ・6月 (米サウスウェスト高校) 12月 (豪 ジョン・トウェンティサード・カレッジ) (○) ・年賀状の交換 (サウスウェスト高校) (○) ・全校集会における報告 オーストラリア派遣研修 (8月) 茨木市国際交流の集い (1月) 茨木市スピーチコンテスト (3名) 米ミネアポリス派遣研修は、政情不安により中止 (○) エ ・12月実施 (○)
4 教職員の同僚性を高め、新たな課題に対してもチームで克服できる体制を整え、学校力の向上を図る	ア 機能的な体制づくり イ 連携の強化 ウ 働き方改革	ア ・分掌や委員会の分担や、担任と担任外の分担を見直し、変化に強い安定した体制を構築する。 イ ・運営委員会への意見の集約、運営委員会からの周知等を丁寧に行い、連携を強化し、動きやすい環境づくりを行う。また、互いにコミュニケーションをとることを意識し、協同して動ける体制とする。 ウ 「大阪府における部活動等の在り方に関する方針」を遵守するとともに、時間外勤務の縮減に取り組む。	ア ・令和8年度文理探究科 (学際領域) の設置に向け、経営企画会議において、分掌や委員会の分担について検討する。 [各学期1回] イ ・学校教育自己診断における教職員の「各分掌や各学年間の連携が円滑に行われ、有機的に連携している」50%以上を維持する。 [62.7%] ウ ・時間外勤務の月平均を前年度より減らす。 [36時間48分]	ア ・随時、検討を実施。(○) イ ・71.1% (◎) ウ ・33時間27分 (○)